

## BOOKS

## ジャーナリストの誕生

本書は「ジャーナリスト」とは何者か?を丹念に追求した研究書である。米国が国際基準であるかのような風潮とは一線を画し、新聞記者の誕生を英国に求めている。

高級文士とリポーターに分かれていた時代までさかのぼり、高等教育機関での資格の付与など、試行錯誤を続けてきた英国ジャーナリズムの変遷が本書の骨格といえる。メディア史ではなく、集団としてのジャーナリストに焦点を当てているところが興味深い。

本書は、二つのモデルを示す。弁護士や医者のように、資格を取得して活動に携われるモデルと、スポーツのように、実力次第で活躍できるモデルである。

専門職に向かおうとする試み、すなわち、ジャーナリズム活動に

## 「集団」どう変遷したか



従事する者の特定化、制度化を目指す流れは、いうまでもなく言論の自由を制限するという矛盾を生む。戦時のプロパガンダ、言論統制がその証左である。

そして、19世紀後半からのジャーナリズムの発展は大衆社会と共に進む。その結果、記者の養成は、資本主義社会においてマスメディア産業の拡大から、営利主義的企業

の要素を色濃く反映し、複雑化されたこともまた事実である。日本では大学大衆化の過程で「マスコミ」就職に人気がでた。

しかし、今やそういう時代では

ない。ジャーナリストが情報発信者として一義的な存在であり続けられるのか、著者はその危うさを指摘している。

21世紀は誰もがジャーナリストになれると著者は言う。確かにこれまで模索してきたジャーナリストに委ねられたウオッチドッグ(番犬)の役割は、組織に所属する記者だけの特権ではなくなった。ただ今日、発信する行為が増えたことがジャーナリズム活動を拡張させている現実はあるにしても、発信者が報道する意義を高めているかは大いに疑問である。

あるべきジャーナリスト像を描こうという著者の意気込みが随所にみられる力作である。

(鈴木雄雅・上智大教授)

岩波書店・2592円

河崎 吉紀著

# 集団としての変遷 焦点当てる

本書は「ジャーナリスト」とは何者か？を丹念に追求した研究書である。米国が国際基準であるかのような風潮とは一線を画し、新聞記者の誕生を英国に求めている。

高級文士とリポーターに分かれていた時代までさかのぼり、高等教育機関での資格の付与など試行錯誤を続けてきた英国ジャーナリズムの変遷が本書の骨格といえる。メディア史ではなく、集団としてのジャーナリストに焦点を当てているところが興味深い。

本書は、二つのモデルを示す。弁護士や医者のように、資格を取得して活動に携われるモデルと、スポーツのように、実力次第で活躍できるモデルである。

専門職に向かおうとする試み、すなわち、ジャーナリズム活動に従事する

河崎 吉紀著

## ジャーナリストの誕生

者の特定化、制度化を目指す流れは、いうまでもなく言論の自由を制限するという矛盾を生む。戦時のプロパガンダ、言論統制がその証左である。

そして、19世紀後半からのジャーナリズムの発展は大衆社会と共に歩む。



その結果、記者の養成は、資本主義社会においてマスメディア産業の拡大から、営利主義的企業の要素を色濃く反映し、複雑化されたこともまた事実である。日本では大学大衆化の過程で「マスコミ」就職に人気がでた。

しかし、今やそういう時代ではない。ジャーナリストが情報発信者として一義的な存在であり続けられるのか、著者はその危うさを指摘している。

21世紀は誰もがジャーナリストになれると著者は言う。確かにこれまで横索してきたジャーナリストに委ねられたウオッチドッグ（番犬）の役割は、組織に所属する記者だけの特権ではなくなつた。ただ今日、発信する行為が増えたことがジャーナリズム活動を拡張させている現実を認めるにしても、発信者が報道する意義を高めているかは大いに疑問である。

あるべきジャーナリスト像を描こうという著者の意気込みが随所にみられる労作である。

（岩波書店、2592円）

◇

著者は1974年、奈良市生まれ。同志社大教授。専門は社会学。著書に「青年と雑誌の黄金時代」など。

鈴木 雄雅 （上智大教授）